釣れ釣れなるままに

２０１４年思い出の釣行記 PART.　２

伝説の男

砂川遊水池のワカサギ

鹿島釣狂

釣友である堀部安兵衛の情報では、今年の砂川遊水池のワカサギ釣りはさっぱりだとのことだ。それでも、前回、息子と二人で出かけてみたのだが、結果的に惨敗だったので、やはり遊水池のワカサギは今年は望めないのだろうと思っていた。それで、今年はもうワカサギ釣りに行くこともないだろうと仕掛けを廃棄し、テントももうそろそろ片づけなくてはと思っていたところだった。

しかし、安兵衛の弁によると最近は釣れだしているのだという。そして、是非一緒に行ってみないかというお誘いを受けた。釣果はべた底でのことで、私の愛用している手羽竿では歯が立たないだろうともいう。そこで、息子が昨年購入した竿先が扁平のものをいじってみた。その竿先が非常に軟らかくできていて、いかにも魚の食い込みがよさそうだ。リールのほうはバックラッシュを起こしやすく、どこかに目詰まりでもしているのかスプールが思うように回転しないようになっていた。それで、３０年ほども前にワカサギ用にと購入してあった横軸リールを取り付けて臨むことにした。エサは前回の物が残っているので、それで間に合わせることにした。

私が３０年ほど前に初めてワカサギ釣りをしたのは、ある工場の敷地内にあるといわれている三日月湖で、私の昔住んでいた砂川の借家のすぐ近くにあった。その池は石狩川と繋がっているらしく夏は鯉釣りをしている人が芋を撒いている姿に出くわしたり、当時としては珍しい（今でも珍しいか？）と思われるソウギョを狙っている釣り人に出会ったりもした。なんでもソウギョは中国大陸から輸入された養殖魚で、雑食性なのだが草魚といわれるほどの大物は、この葦の葉っぱに食いついてくるのだと、風変わりな仕掛けなども見せてくれた。ほうれん草やキャベツをエサにして釣ってみたりもしたのだが、やっぱり

葦の葉が一番なのだそうだ。口に歯はないのだが、喉に丈夫な咽頭歯を持っていて、これで沼に垂れ下がった葦の葉っぱを刈り取って食べているらしい。

ソウギョ

この池には雷魚もいて、私が勤務していた職場にも持ち込んで来て、大きな水槽で飼うことになった。ニシキヘビのような大きな頭に鎧のような鱗を持ち、獰猛な顔つきが水槽を覗き込む者を威嚇しているようで、手で触れることが出来ないような容姿をしていた。しかもその風貌に似合った威厳を保とうとでもしているのか、エサとなるドジョウを水槽に入れてみても、すぐにはそれを飲み込む様子を見せてはくれなかった。次の日もドジョウは元気に泳いでいた。しかし、３日目に水槽をのぞいてみるとドジョウの姿は消えていた。自分の口元を平然と泳ぐドジョウに癇癪を起してしまったのだろう。その後は、ミミズやドジョウ、カエルなどを入れると、目の前で大きな口を開けて吸い込む様子を披露してくれるようにもなった。現在はどちらも日本の固有種を絶滅させる害魚として指定されているがその生存の方はどうなっているのだろう。

ライギョ

その池でワカサギを釣ったのは、水深が深いところでも２ｍほどしかなかった。職場に訪れていた何人もの人からワカサギを釣ったと聞かされていたので、自分も試してみるかと、現在使っている例の手羽竿とリール付の竿を購入して様子を見に行った。その当時はテントを張る釣り人もおらず、湖面に張った氷をツルハシやスコップで穴を開けて釣っているのだが、その初めての釣行の日は大変天気の良い日で、なるほどと思わせるほど１０㎝上のワカサギばかりが次々と釣れたのだ。それに気を良くして何度も通ったのだが、吹きっ曝しの氷の上なので手が凍えてしまってあまり良い思いをする事がなくなりやめてしまっていた。

最近はチーズを食べさせたサシを売っていると聞いているが、その当時は、バターを食べさせ太らせてから使っている人がいた。また、鶏卵の方がいいというのでそれを使ったりもしたが、効果の程は分からないでいる。

さて、当日の遊水池のワカサギ釣りの話に戻そう。２月２３日のまだ夜明け前の５時に寝床から起きだして、前日準備しておいた道具を車に積み込み、砂川へと向けて出発した。安兵衛はまだのようだ。池の畔に着くと、１０張程のテントが並んでいる。深いところがよいというので、テントを広げ、雪を除けながら安兵衛を待った。安兵衛が大きな荷物をソリに載せてやってきた。予想していた釣り場と少し違ったようで、水深が９ｍ程の沖合に釣り場を設定して穴を開け、テントに潜り込んで準備をした。

早朝なので魚が浮いていることも考えられると思い、まずは手羽竿でやってみる。しかし、アタリは出ない。リールを準備する。昨日は簡単に出来ると高を括っていたのだが、何やかんやで手間取ってしまった。安兵衛が、釣り始めていてやっぱり底でアタリが出る

と言ってくる。２匹、３匹と声が掛かり次々と釣れているようで、焦りが出てきてしまう。さて、リールの準備ができて仕掛を氷の穴に落とそうとすると途中で止まって落ちていかない。錘が軽すぎたのだ。いやそうではなさそうだ。前回よりも氷が厚くて途中の氷を掬い切れていなかったのだ。安兵衛から、厚い氷を削る大工さんが使うノミを大型にして柄を長くしたものを借りて深いところにある氷の欠片をつついた。すると大きな氷の塊が次から次へと湧いてくるようにと浮いてきた。

ようやく準備が整い仕掛を底まで落とすと、やはりアタリが出る。錘を底に付けてやると食い込みも良いようだ。しかし、釣れることは釣れるのだが隣のテントから安兵衛がささやいてくる様子とは随分違っているのだ。臆面もなく安兵衛のテントに潜り込み、彼の釣り方をじっくりと拝見させてもらうことにした。

ワカサギは順調に釣れていて、私とは初っぱなから水をあけられてしまっていた。彼はやはり底釣りに関しては長年の実績があるのか、一回の落とし込みにワカサギが連なって上がってくる。手返しも早い。そして、もう一本出している竿にもワカサギが連なってきているのだ。また、エサ替えを頻繁に行っていて、そのスピードも速い。さらに仕掛は自分で１号のハリを巻いてチモトに夜光塗料を塗り付けた手の込んだオリジナルなのだ。仕掛の上部には極小のガラス玉が４個並んでいて、それが群れたワカサギの目玉を連想させようにに仕込んであった。

私の道具といえば、３０年も経ってしまったリールの油が腐っているのか、錘がゆっくりとしか落ちていかない。下手すると止まったままである。そうなるとリールから道糸を手で引っ張り出す作業を加えなければならなくなるのだ。また、リールの巻取り量も少ない。ハンドル１回転にスプールが１回転、昔で言えば太鼓リールのような代物なのだ。あげくに竿が短いときている。手返しが悪すぎるのだ。そんな私の様子を見かねたのか、安兵衛が、竿、リール、仕掛けをそっくりそのまま貸してくれた。

それからは順調に釣れ続いたが、なんだか他人の褌で相撲を取っているような気分で居心地が悪い。自分は大して上手くもないのに、さも自分が上手くなったような錯覚をしてしまうのが嫌なのだ。しかも、その土俵であるテントも安兵衛が設置したものだ。あげくに、テントに持ち込んだ石油ストーブの上でシュンシュンと湯気を立てているヤカンからお湯を注いでコーヒーを入れてくれる。甘酒はどうだと勧めてくれる。それで居心地が悪くなってテントから這い出したかって？そんな野暮なことをするわけはなく、安兵衛の親切にたっぷりと甘えてしまった。そんなこんなで、その思いのこもった熱いコーヒーをすすっていると、私の惨めな思いに追い打ちをかけるように、安兵衛が言った。「早くから俺の竿を貸してあげてればよかったのに、気がつかなくてごめんな」と。

１５００ｇ程を釣ったレジェンド安兵衛

私の釣果は９８０ｇ。今日は７㎝～１２㎝の大物が多かった。

帰り際に、車に荷物を積み込んでいると、近くの農家の釣り好きなおじさんが安兵衛を待っていたかのようにやってきた。そして今日の模様を交流し合っている。これが大切なのだと思う。彼はこの池ではちょっとした顔なのである。一日中テントの中に潜り込んでいるので、顔を合わせるのはほんのわずかな時しかないと思われるのだが・・・。この遊水池で彼がワカサギを釣り始めた頃は悲惨なこともあっただろう。

ソチ冬季オリンピックのスキージャンプ男子で７大会連続の代表となり、初めてメダルをとった４１歳、葛西紀明。海外からレジェンドと称賛される男は、世界大会の活躍とは裏腹に「五輪」では怪我、悲劇に見舞われていた。初めての挑んだリレハンメルオリンピックから２０年、ついに彼にも花開くときがやって来たのだ。安兵衛も葛西選手のようにこの遊水池のレジェンドとなるのだろうか。

「この次にここに来るときは、道具を買いそろえてから再挑戦しようと思う」と安兵衛に話してみた。しかし、この砂川遊水池でワカサギ釣りが許されているのは２月末までらしい。何時のことになるのだろうと考えていると、彼が言った。「３月になったら朱鞠内湖に行ってみないか。初任地が幌加内町だったから自分の庭のようなモンだ。」と。私はあえて言いたい。「いろんな所で伝説をつくるなよ。」と。